

# 三河アララギ

2023年 令和5年12月 師走しわざ

十二月号

第七十卷 第十二号



ニューヨーク日記(206) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

BEYONCÉ' S RENAISSANCE TOUR

Blue Shoe Diaries



日本にいる間にビヨンセのマイアミでのコンサート行きそびれたから彼女の地元、ヒューストンのショーを観に飛行機乗って行ってきました!やっぱり流石のビヨンセ。唯一無二のアーティスト。観客全てが熱狂的なファンでビヨンセになってオシャレして来てた。パフォーマンスは衣装替えも多くてコンサートを超えてファッションショーでもあり、シアターでもあって完璧なエンターテイメントだなあって実感してきました。行ってよかった!

Experiencing Beyoncé's Renaissance Tour in her hometown, Houston, was an unforgettable journey — a literal one, as we traveled specifically to Houston for the show. The energy in the air was electric, a palpable excitement that only Queen Bey can evoke. Her performance was spectacular, each song and move resonating with the love and admiration of her home crowd. Beyoncé, truly in her element, reminded us once again why there's no one quite like her. Her magnetic presence and unrivaled talent transformed the evening into a once-in-a-lifetime experience, leaving us awestruck and deeply grateful for the journey.



## 歌集 わが冬葵

御津磯夫

西側の窓の夕映えに寝返りしてまたもの讀むまでになりたり

わがやまひ治りしといはずけふも診るわが患者らは老いて逞し

東北よりはしり來りてわが腕に子はためらはず点滴の針

子ら三人醫師になりこもごもに診断す醫師なるわれの老いの病ひを

わが病みて診ざる一と月二た月轉醫しゆかぬわが患者たち

今夜あたり匂はむ夜香木やかうぼくに注ぐ水を提げてゆくかなよろめく足に

わが七十年俵ばかりありありて豫後よろしとぞ秋澄む光

撰びよみしわれの一生の三千冊幾重にも積む病む床のへに

涼しき秋をたのみて臥ししかど癒ゆるなくして朝寒くなりぬ

友ありてたまものの青き黒きぶだうやすやすと我の喉のどをとほる

歌集 「草々」

今泉米子

酸素吸入のゴム管つけたるわが顔を牡丹文長柄の鏡に映す

雲切れて南に低く青き空見えつつたちまち夕べとなりぬ

倉屋根の瓦光れりわれの眼に見えざるままに雨のふりいづ

朱膳朱椀また使ふことなかるべし倉の瓦にふる三月の雨

庇より光りて落つる雨雫眺めつつゐて時たちにけり

檐のきに吊る江戸風鈴の短冊に雨間のままの日の昏れてゆく

届けられしおうなまよう嫗用といふ藤の杖を枕べに置きて夢をたのしむ

小皿には中庭より採りし土筆あり今日の夕べのものいただきぬ

支へられて廊下を歩き己が部屋の書棚より出だすノート一冊

杖にすぎりよろよると来てつくばひ蹲の苔のみどりに沁む春の日の雨

## 昭和63年四月号作品

大須賀寿恵

傘寿碑まで廻り道せむ血圧はけふ正常とわれは言はれて

供華より鶯一羽翔び立ちぬわが通り抜けゆく浄願寺墓地

傘さして出でて歩めり傘に落つる雨音やさし久々の雨

やぶ梅の枝つたひつつ遊びをり胸毛美しき放れ文鳥

淡々と白き雲高き今朝の空けふは吾が日とわがひとり思ふ

夕餉終へてひとりのぼれるベランダより低き鋭き二日眉月

里芋の煮ころがしの上に付け合はす茹でてさ緑の砂糖豌豆

磨りおろす墨は漆黒の渦なして墨海の水と交はりゆきぬ

古竹に若竹交り並びつつなびき合ひをり孟宗竹叢

その花を好みるたまひし母に供ふ未だ葉ばかりの黄の水仙を

## 昭和63年四月号作品

夏目勝弘

舗装路の端にい出る僅な土も朝々の霜にいたく荒れたり  
冬枯れの草々などを見る時の少なくなりたるを淋しみ思ふ

ひたすらにスキーに遊ぶ一日が年に一度の私の楽しみ

雪原に大の字に寝る楽しさを何に譬へむ譬ふるものなし

税金を取られぬといふ一言で優の手続に来る老人多し

老人に優制度残せしは一種の詐欺と思へてならぬ

利子税を取られるがいやなら使へばよい預貯金のなき私の思ひ

優の三百万円手続せし老人等あと幾年生きるにあらむ

堰堤より僅かに残る水を見てまだ有るまだ有るといひ合ひ帰る

柔らかき日射しとなりたり朝よりクソサバキは藪より出でをり

『歌集 八千代』

蒲郡 岡本八千代

くれなゐの薔薇を窓高く咲かせつつ接骨医治療室小さかりけり

わが吊りし宿直室の青蚊帳の木綿の匂ひ強くひろがる

生徒らに書かせし手紙文に幾通かわれに宛てたる岡本八千代先生あり

霽のごとき梅雨のふりつつ教室の窓の硝子の白く濁りぬ

今年の梅雨遅れてけふも降りをりて君はベッドに小さかりけり

注射のあと紫になりたる君の手をいつまでも我はさすりてをりぬ

枕辺にかかげし夫の紫陽花の絵も見えなくなりし君のへにをり

母とわが呼びぬし人の逝き給ひぬもどり梅雨降る此のあかとき

いつしかに自由行動をやめにして二条陳屋へみな行きたがる

仇野にも三千院にも行かずしてただ従ひぬ京都の街を

ひとり離れて仇野を見にわが行くとつひに言へずに帰り来にけり

忍者屋敷の南の庭に咲きゐたる白き芙蓉の大きかりけり

「子規といふ人」鞆に入れしまま帰る二泊三日の修学旅行

十八歳で死にしといふツタンカーメンの黄金の寝台小さかりけり

ツタンカーメンの胸に両手を組みし姿未来の労働を意味するといふ

## 冬の朝顔

豊川 弓谷 久子

うす紅の小さき蕾となりながら咲きなづみゐる冬の朝顔

届きたる毛布の中より音立てて転がり出でたりどんぐり一つ

我が猫を埋めて盛りたる土の上に小さき八ツ手を植ゑむと思ふ

玄関に大根二本置きし人の足音は夜の道に消えて行きたり

御歳暮と書きたる箱にわが手編みの春の上着セーターと帽子とを詰めむ

柚子の香の残れる昨夜の風呂の湯を汲みつつ今朝の洗濯をする

空缶に寄せ植ゑにせし楓三本小さきままに紅葉しにけり

夫に見ゆる机の上に鉢植ゑの小さき楓の紅葉を置かむ

左利きの器用なる夫なりしかど左手動かずなりて八年

我の手に余るまで大きくて跳ねてをり形原より今朝届きたる鰈

石の階に冬日遍き金剛寺身重の娘と登り行きたり

小さき絵馬に安産祈願と書き込みぬ線香の煙の漂ふところ

御津川の夜半せせらぎを聞きてをりまた一年の過ぎ行くにけり

少しだけ若がへらむと今宵よりベージュ色淡きマフラー編まむ

里芋の煮ところがしなど作りおきて夕べになりて子の家より帰る

## 奄美大島

東京 今泉 由利

天然と神と人と奄美大島と太古のつづきつづきの中へ

来たり観る奄美大島大歴史に分け入る出逢るつ

黒潮と亜熱帯性高気圧に育くまるるマングローブの森にわけ入る

一二〇〇万年ユーラシア大陸の東端にして共通陸生生物相を確かむ

奄美大島中央部「湯湾岳」「油井岳」亜熱帯照葉樹林の存在尊し

奄美大島南中央部より海域までは役勝河内川となりて流るる

湯湾岳油井岳よりの天の水マングローブの森に至る

トンネルをくぐりてゆけりトンネルの幾つ幾つトンネルを

湯湾岳を望みてゐたり最高峰海域までの亜熱帯見ゆ

はるかはるか太古の自然のつづきつつ神あり人あり奄美大島

いま芽吹くマングローブの幼木も島の自然の時間の中に

天よりの豊かな水は雲霧帯よりマングローブの林へ海へ

海水と淡水と混るマングローブ樹林歩いてゐたり佇みゐたり

尊々我無続ききたりし時の内静かに静かに静かに

親しみき機織り次第も近くにて奄美大島親し愛し

## 秋風に

豊川 安藤 和代

厨歌生活詠の多くして私情詠みたし今朝の青空

秋風に洗濯物がゆれているそんな小さな幸せもあり

書いて消し消しては書いて詠む短歌横にて孫はフフフと笑う

露草の藍の深きに魅せられて友に送らん絵手紙ひとつ

稲は早色付き初めて豊作を祈れば二羽のサギの飛び立つ

気休めか？それもよからうアリナミン元気のもとと笑顔なる友

ハロウインに合せて南瓜作りたる志げさんは今いづこあたりや

読みさしの葉もいつか色褪せて亡夫の記読めば百舌の高啼き

取り込めば晴れて干すれば降りい出すひと日を雨に遊ばれており

広びろと実り田の中郵便の赤きバイクが秋を分けゆく

秋風にお洒落心をくすぐられ少し色濃きマニキュアをぬる

休日はパパと幼の散歩道宵待草はひそやかに咲く

里芋をコロコロ煮れば秋やあき夕焼け雲の淡き広がり

悩みなどすべて持ち去れ秋の風冴えし月あり竜胆も咲く

すでに茶は冷めて一首のまとまらず静かに秋の夜は更けてゆく

【追悼】 会釈・絆 春日井 清澤 範子

暦の日の出午前四時五十二分増築の窓より陽は差し始む

バイクの音して朝刊を受け取りぬ玄関のタイルにポツポツの雨

巾狭き歩道を人と向ひ来ぬ吾会釈して通り過ぎたり

大根の葉にはビタミンの多くして柔らかき葉を一夜漬けにする

売り出しの蕪の大玉買ひてこし莖は細かくたたきて漬ける

ダリアの花大きく鉢に咲き続く穂高の郷の庭に咲く頃

八王子神社に詣で柏手を打つ時聞きぬ初蟬の声

神社に詣で心静めて帰り来ぬ日々草の花に水やる

婿もなき娘と暮せば折々にそれも良きかなと一人思へり

雨の中にも鳥の声あり廊下より庭に育ちし椿見てをり

夫の育てしジャガ芋料理は色々肉ジャガに始まり肉ジャガに終る

鏡みて笑ひて見るよ齒の並び型とり入れてうれしき心

ブレーキ引き車降りればわが娘さつと吾の手握りてくれる

娘の手握り返せば温かく親子の絆な通ひ合ひたり

娘は手を振りて角を曲るまで見送る吾にこたえて行きぬ

## 今年の梅干

豊川 山口千恵子

畦道に赤々咲ける彼岸花年に一度季を違えず

夏の日の暑さを凌ぎ咲き始む秋になりゆく彼岸花赤

暑き日の続き秋の待てる日々曆どほりに咲く彼岸花

昼下がり喫茶店に向ひ合ふ還曆迎ふ健やかになりし娘と

一人住むひな子に持たす小分けして小瓶にいれし今年の梅干し

九月尽涼しくなりし庭の草弱々青きメヒシバの穂

満開のコスモスの花に立ち止まる風に吹かるる花びらはかなげ

休耕の田に咲き盛るコスモスをバイクの青年写真を撮りゐる

バイク二台連らねて来たる青年は畑のコスモス写真に撮りゐる

散歩道に今年も銀杏拾ふなり一年過ぎたり栽かさねゆく

二度三度繰り返し話す思ひ出話笑ひ聞きつつ少し悲しき

手の甲に止まれる秋の蚊を打ちぬつぶせば滲む血はわれの血

友の姿久しく見ざる秋の日々庭に乱れて黄花コスモス

秋の陽に洗ひし銀杏箆に干す日当たりの良き場所を探して

洗ひ干す銀杏秋の陽の中に白々乾くを時折触り

## 獅子舞神楽

蒲郡 杉浦恵美子

藤井さん見たことあります東京行新幹線の自由席窓

藤井八冠中学時代は新幹線自由席のみと聞きしことあり

この歳になりて初めてちゃんと見る三谷祭とはこんなに多彩

三谷祭祭り女と自称する友が穴場に我を案内す

いや確かにこの場所からは最高潮獅子舞神楽が真正面に見ゆ

十月も半ばとなれば日の暮れも早し神前舞の奉納

幽かなる明かりの中にゆるゆると時代装束の舞が続けり

三谷祭獅子舞神樂の取り巻きの悲しげなる唄耳に残れり

我が夫は冬の晩酌湯豆腐がぐらりと煮えばな鍋の火止めぬ

我が夫は湯豆腐煮えばな喧しき遙か昔を頻りに思ふ

湯豆腐は夫在りし日は旨しとも思はざりしが今宵の一品

ああこんなところが叔母の氣遣ひぞ目立たぬ場所にそつとしてある

叔母の孫ふたりの幼時はお揃いの手編みのセーター着せて居たりき

康ちゃんが好きと章姫濯ぎつつ帰宅を待つ叔母祖母の顔なりき

叔母の孫ふたりはとつくに好青年祖母の慈愛は思へと言ふまい

## 一歩また一歩

大阪 伊藤忠男

一歩行き一歩進みてまた一歩歩み続けてこの日迎える

残された我が道ありや晴れ曇り霧に隠れておぼろなりけり

歳忘れ若いと思うは歳のせい脳の衰えなるがゆえなり

病院と役所胸張り足早に歩くは私の心意気なり

新聞を配るバイクに起こされる窓はしらじら夜が明けるなり

東の間の冷氣漂う朝ぼらけ下駄掃き庭をゆるりと歩く

玄関の鏡に映る我を見て大丈夫かとチェックするなり

眠くなりあくびを堪え本見る目虚なるかな文字ぼやけたり

また一人わが師の訃報届きたり照らす灯消えはつるなり

自らは光を持たぬ星だとして光に会えば輝き放つ

西陽背に自宅に急ぐ阪奈道東の空は黒雲覆う

雨上がり西空見上げ虹拝む災いばかりが続くはずなし

草原を彷徨い歩く夢を見る我ら祖先の辿りし道か

何言わず何もせずとも脈は打つ人の真心気づかぬなりや

見返りも邪心も持たず会える人友と呼べるはその人のこと

## 花壇

豊川 白井 信昭

この月の十月号届き今し知る岡本先生逝かれしこと

月毎の「中央公民館講座」月例会出られしことも今は懐かし

俊成の里『蒲郡短歌大会』審査員先生の講評あの日この時

月例会まがりなりにも締めず続けて来てこそ今の我あり

生垣の土留支柱管横組みの単管パイプひとつ撓めり

幾段もコンクリ柱横積みに基礎との隙間ふぞろいにして

角口の銀木犀ひとつる生垣に日のある内に移し終えけり

生垣と居宅との間あいだ土盛りて雪柳幾つ切り分け植わらむ

アパートに家族揃いて夕食後孫の運動会ビデオの視聴

一株の雪柳残し今日よりは嵩下げにまず堀り採る球根

雪柳根元こんなにも大きかり株分けせむとスコップに堀り分ける

コーナーに振動ドリル打ちながらようやく単管一つはがせり

蛭石崩れぬように五囲いの内外側下段石あまた詰める  
ほたるいし

夕さればさ庭辺に聞く頻り鳴く鈴虫の声移りゆく秋

遠けれど宵さらず見む見あぐ空部分月食か欠けくつきりと

## 積み重ね

埼玉 矢崎 直人

月の夜車の下で鳴く猫と目が合う闇に光るまなこに

駅舎から眺める富士の雪被り裾の広がる白くなだらに

雷の鳴りて降る雨週末の朝久しぶり天気崩れ

値上がりで手に取り戻す数々の品の数々籠に戻らず

秋の空びつくり市の高円寺阿波踊り連続り歩いてく

同じ本読んで感想それぞれの重ねて秋の古書店の上

句の友とビルの間をぬい歩くそこがどこだか分からずにゐる

近づいてまたは離れて寄る心強き心も弱き心も

やり直す考え直す日々の中人の姿を見つめ直せる

日常を日々を過ごせる大切さ積み重ねてく人と人の手

中庭のソーラン節の掛け声の高く高くに集いのぼりく

そわそわにふわふわ気分の高揚の人から人へ輪になりてゆく

利用者の喜びくれる顔をみてお祭りの気分思い出したり

バス停の風のひんやり秋の宵祭りの余韻きける耳奥

ハロウインの塗り絵折り紙工房のそれぞれの手のそれぞれの色

『いじよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

蚊帳を吊る曾祖母の影幽かなり記憶の彼方三歳の頃

水野 絹子

この三日打撲の膝を庇ひ過ぐ亡き父の杖に今も縋りて

肩を貸し恩師の許へと付き添ひぬ三田さんの背よその華奢にして

春と秋われと娘の畑作り要領得たり早々と終ふ

牧原 規恵

十余年続けてをりぬ畑仕事娘と二人楽しきひと時

中秋の名月だよと夫の言ふだんごにススキお供へしやう

中三の孫に送りぬ徹夜にて読みし思ひ出の「風と共に去りぬ」

稲吉友江

シーツ干し空見上ぐれば行合ゆきあひの雲の出でをり秋まう間近

娘より鯖缶届きて思ひいにしへゐる古人へびとの鯖街道を

まうそろそろ八千代先生の庭の萩咲き初む頃か訪ひてみたきに

鈴木美耶子

アセビはねアシビとも云ふと先生は庭の真中を指してゐらした

この道は稲生の海へと続きゆく散歩をされし先生の道

困難に出会ふ度我は問ひてみる「八千代先生なら何と仰るか」

伊藤晴江

「さらけ出すの自分自身を」と言はれたりき短歌作りの師の言思げんふ

シユークリームほほばりながら師は我らに「姦しいね」とほくそ笑みたり

タラップの段のきざみは大きくて「しらせ」に登る膝上げ登る

牧原正枝

スベスベの甲板に壁の碎氷艦極寒の地へ向かはばいかに

碎氷の装置は見えぬ「しらせ」なり丸穴並ぶオレンジの艦首

先生を偲びて文をしたためむ折しも雨落ち雷までも

森 厚子

通りがかりに呼ばれた気にしてふと見やる先生のお庭に野ボタン咲きて

同窓会の思ふに任せぬステージは「古稀に感謝」を言ひ訳にして

起き出でて元気な朝は散歩する足の向くまま気の向くままに

大 武 智 子

早朝は匂いに敏しガソリンの微かな臭ひ風に乗りくる

細く細く刻みてキャロットラペ作るわたしは何を忘れたいのか

## 現代学生百人一首

東洋大学

世界中飾り彩る十七色地球の未来の希望か枷か

慶應義塾中等部三年 山川 颯月

夏休みもがきまくった部活動大会中止心が折れる

国士館高等学校一年 藤田 潤夏

新語なの「はにゃ」と言われて困惑中誰か私に意味を教えて

国分寺市立第五中学校三年 川瀬 天寧

大好きな車の運転やめにしてバスに乗る祖父小さく見えた

国分寺市立第五中学校三年 渡邊 結

女子美生絵の具のついた仕事着の汚れでさえも作品のよう

女子美術大学付属中学校二年 丸井 遥香

やつが来た「ブン」と横切る吸血鬼正義の父のバトル始まる

世田谷区立喜多見中学校二年 石川 奏太

「今日濃いね」ポカリの味に気づく君好きの想いに気づくのはいつ

専修大学附属高等学校一年 長岡 芽

あの人は今頃なにをしてるかな知りたくなるし知りたくないし

専修大学附属高等学校二年 石川 直樹

『俳句』

贈呈本二冊届けり秋初め

植村公女

柿紅葉一枚添えし便りかな

初秋の血圧計にじれてをり

水車小屋玉堂の秋色づいて

木村歩歩

金の穂の波に稲木の筏揺れ

競い合うマラソン人と秋あかね

迎え出る友の懐かし金木犀

地下室にMRI秋深し

田仕舞や月山ありて水よきと

今泉如雲

鈴木清風邸跡ハローと花木槿

この町に芭蕉十泊そばの花

十月月車の下の眼の光

天高くソーラン節の掛け声の

秋の空人の加わる祭りの輪

秋天や句友と歩くビル狭間

雷やキャッチボールを中止せり

信濃路や昔とんぼのツイとゆく

色あせて萎えゆくことよ敗荷やれはちす

心にはとても寂しい神の留守

花卉の黄あざやかに菊なます

遠目にも朱のするどし烏瓜

矢崎直人

今泉由利

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

天高くひと刷毛雲の車窓かな

木風

秋の日に名は田舎びて佐久平

上田城この秋空によろしかろ

山々の遠き葉青く澄みわたり

澄む秋の否応無しグリーン席

秋に入る上越妙高雲淡し

トンネルをくぐれば秋の糸魚川

上野から書物不要の秋景色

根知川や四億年の秋の中

ユネスコのフォッサマグナに蓼の花

猛暑もうしょでは日陰ひかげの苔こけも茶ちやに染そまる

雄山

草刈くさかりの容赦ようしやなく降ふる夕立

虫むしの声こゑ人生じんじやうひとり寂さびしさや

齡老としおいて奥歯おくはに感謝かんしゃ良く食たべた

バンカーのボールの上うへに赤あかとんぼ

老人らうじんの日ひを意い識しして今いま一ひと日ひ

つねこ

桃届ももとどく包つつみとく間まの夫おつとのえみ

人ひとだかりの野路花のろじはな大根だいこんの明あかり

公園こうえんの小川のこうがわは清しみずし水みず温ぬるむ

## 五感を澄ませば (18)

杉浦恵美子

### 中秋の名月

今年は何年かぶりの中秋の名月と満月とが重なる見事な十五夜の月でした。

韓国ではこの旧暦八月十五日を秋夕(チュソク)と言って旧盆にあたり、祝日でもあり、古くから続く名節だそうです。

最近フォローしている若い韓国ユーチューバーがこの夕、ソウル近郊の公園から、池の彼方に上る月の映像をライブで見せてくれました。

公園の池の周りを、人々が思い思いに散策したり、ベンチに腰掛けて月を鑑賞したり。

日本にはない習慣なので興味深く見ました。

ふと悪戯心を起こして、我が見上げる月と、スマホに映るソウル近郊の月とを、手を伸ばして並べてみました。

もちろんスマホの月は小さすぎて比べるには無理がありました。これを現代ならではの何だか不思議な感覚。

同時に、東アジア共通の中秋の名月への想いが融合した感じもして。

天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも

と歌った阿倍仲麻呂もびっくりでしょうね。

小倉百人一首にある余りにも有名な歌。今まで「唐土で中秋の名月を見て望郷の念を詠んだ歌」と思っていたが、実際は長い間唐の朝廷で働き、30年ぶりに漸く帰国の途に就くための送別の宴席で、「仲冬の十六夜」を詠んだ歌とか。

つまり「嘗てこの月を見た故郷にじきに帰れるのだ」という希望に満ちた歌ということ。

但し悲運にも船は難破、漂流。結局諸事情から帰国を断念。異国の地で逝去。

しかし作歌の経緯が判っても、作品としてひとり歩きすれば、「何ひとつ遮るもののない唐土の中秋の名月に寄せた募る望郷の歌」と思ってもよいのでは。

それにしても、仲麻呂が唐土で見た月(千三百年も昔の)、現にわたしが見ている月、ソウル近郊の月、それぞれ時空は隔てているけれど、常にもの悲しさを齎します。

夜には似つかわしくないその明るさによってでしょうか。

そこで思い出すのは、かの『竹取物語』。

かぐや姫は八月十五夜が近づくとき悲しみに暮れるようになり、翁の問いに到頭「自分は月の都の人であつて十五夜には帰らなければならぬ」と告白。

そこでかぐや姫がいよいよ昇天する時の月の描写を見てみましょう。

「かかるほどに、宵うち過ぎて、子の時ばかりに、家のあたり、昼の明さにも過ぎて、光りたり。望月の明さを十合はせたるばかりにて、在る人の毛の穴さへ見ゆるほどなり。」

大体この物語は、竹から生まれた女の子が三ヶ月で美しい女性に成長するというあり得ない設定ですが、月の明るさの表現も大袈裟。でもちよつとユーモアのセンスもあるかな。

古代の人々が中秋の名月をこんなふう想像を膨らませて見ていたかと思うと、アメリカ映画『ワンのシーンを連想し、古典がぐつと現代に近づいた感じがします。さて、もうひとつ月を歌つた名歌を鑑賞したいと思います。

暗きより暗き道にぞ入りぬべき遥かに照らせ山の端の月

和泉式部

長い間「山の端の月」は、東側の山の稜線に上り始めた十五夜の月をイメージしていましたが、一説には「山の端の月」は「西に傾く月を表し、西方浄土へ導く教え」とか。

これは私のイメージとは方向が正反対であるばかりでなく、仏教的な意味も深く、恋多き女性の側面だけを見ていると、作者の本質を見逃してしまうなと思つたことでした。

最後に小倉百人一首からもう一首、

月見ればちぢにもものこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど  
大江千里

これはどなたも共感できる歌でしょう。

ややこしくなるので触れませんでした。月の出の時刻や形も古人は細かく観察して興味深いのですが、それはまたの機会に。

中秋の名月があつて、それを愛でる沢山の名歌があつて、それを口ずさむ愉しみがあつて、ちよつと素敵な、日本文化。

間に合わせの庭の草花やや淋し今宵の満月荘厳美麗

## 附録（十八）

矢崎直人

### 天高くソーラン節の掛け声の

職場の中で小規模のお祭りがありました。コロナの前は外からお客さんと呼んで楽しんでもらうイベントだったのが、数年ぶりに復活とのこと。今年は、職員と利用者が楽しむ会になりました。屋台風にカレーパン、タコライス、ぐるぐるウインナー、豚汁、デザートドリンク、綿あめを用意して食べてもらいました。中庭で、職員と利用者さんが一緒にソーラン節を踊りました。皆が笑っている顔に久し振りにお祭りを味わいました。

### 中庭のソーラン節の掛け声の高く高くに集いのぼりく

### 十日月車の下の眼の光

仕事から帰る途中でにゃあにゃあと鳴いている声がします。辺りを見回してみると駐車場の車の下に猫がいました。明るい時は、道路を横切って走っていく猫を目にすることがあります。最近、暗くなるのがはやくなり寒くなってきたので、猫の鳴き声が寂しげです。そうかと思えば、意外に眼の光が力強くて十日月の膨らみかけた煌々とした明るさと重なり印象的でした。

月の夜車の下で鳴く猫と目が合う闇に光るまなこに  
雷やキャッチボールを中止せり

十月の中旬から秋晴の晴天が続き気温が下がりはじめ日中は穏やかな日が続いていました。お互いの仕事の都合で週末に続けていた友だちとのキャッチボールは、朝から雷が鳴り土砂降りです。中止になりました。そういえば、雷が目覚めたのは久しぶりな気がしました。

雷の鳴りて降る雨週末の朝久しぶり天気の流れ

# 『WBCは、遠くになりけり?』

中屋保之

どうしたら、あんないい子に育つんだろう。大谷翔平君である。野球に疎い方でも、その名が世界に轟いたことは言を俟たない。彼を含めて、あのメンバーたちの一途な姿に感動を覚えたのは、今年の春だった。もう遙か昔の出来事のような気がする。嬉しい出来事が少なかったからかな?!

『今年「最も暑い年」 确实 一〇月 世界の平均気温最高』の新聞記事を見た。欧州連合（EU）の気象情報機関である「コペルニクス気候変動サービス」によると、この期間での世界平均気温が観測史上（一九四〇年以降）最高となったそうである。我が国でも十一月初旬の東京で27.5度と十一月の観測史上最高を記録した。

また、今年「ハラスメント」についての出来事が多かった一年だったようにも思える。半世紀以上前のこと、「うちの部には、女の子は、いないよ」私が所属していた職場のBOSSの声が聞こえた。支店からの電話に対する彼の応答に、我が意を得た思いを今でも鮮明に思い出すことが出来る。当時はまだ、女性社員は補助職との認識が一般的だったし、今では考えられない様な「セクハラ。パワハラ」的な行為もなかったわけではない。世の中の変化をいち早く察知し悪弊を排除する行動を、先頭に立って範を示してくれたのである。「ハラスメント」は、した方は気が付かないケースが多いと聞く。それを言い訳にはできないという事を肝に銘じて行動せねばなるまい。これを前提に、敢えて言うならば一部タレントなどが主張する「どんな服装で人前に出ようが、私がしたいようにするのどこがいけないの?」的な発想には些か同意しかねる。そこに「自由」の履き違いを感じるのは私だけであ

るか。履き違いの意味は「履物やズボンを間違えてはくこと」とあるが、「履き違」えれば折角のファッションも台無しになるリスクも在りそうである。「自由」を主張するためには「責任」も大切な要素であることを認識したいと思う。

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が解決には程遠い中、中東ではハマスVSイスラエルが勃発、「核兵器使用も辞さず」の文字が恐怖を掻き立てる。平和維持のための諸条約が紛争当事国のご都合で反故にされている。新聞の片隅に「日本国内にNATOの事務所開設を検討」とあるのも、紛争当事国の一方への過度な肩入れととられかねないか、最近とみに目立っている政府の決定過程の不透明さや拙速さとともに気がかりである。

長崎には、原爆による倒壊を免れた校舎の一部を平和記念館として保存して公開している城山国民学校（現城山小学校）があるという。約一千五百人の在校生のうち一千四百人が亡くなったこの学校の児童たちは、毎月九日に「平和は城山から」と平和記念式を継続していると聞く。平和を願う「灯」を消してはなるまい。

暗いことの多かった今年、嬉しい出来事があった。私たちが所属する会の宗家が秋の叙勲で褒章された。宗家は長崎に縁がある方で、時折私たちに「長崎の鐘」を聴かせてくれる。

来年も平和な一年が過ごせて、その美声で締めくくることが出来るよう祈るばかりである。

## 楽しい時間 133

山本紀久雄

2023年10月31日

### 「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その十八

前号で、明治6年21歳時「洋風」姿の明治天皇写真と、明治21年の民衆が礼拝した「御真影」としての肖像画の比較によって、天皇がいかに深化されたかを窺うことにしたいと述べたが、今号で明治天皇についての掲載を終えるにあたって、この連載のテーマである「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」についてお伝えしたい。

明治天皇は、帝王として必要な学問を二応学んでいたが、それよりは馬術にのめり込み、酒を好み、どちらかといえば勉学は得意ではなかった。だが、明治憲法制定過程では、徹底的に検討し、問題点の把握と、自らの立場の検討を行ってきたことを通じ、その後には発生した問題・事件に対してどう立ち向かうか、という判断基準を体にしみ込ませた。

その体得された基準から意志決定を行うので、妥当な判断が可能となったわけで、この境地は鉄舟の大悟という心境に近いレベルと考えられ、脳の中に妥当な判断基準を持つことが出来れば、その人は素晴らしい才能を発揮することができるという事例が明治天皇であったと考えている。

明治天皇は「大日本帝国憲法は、自らがつくった欽定憲法である」という認識を強く持ち、そのことを誇りにしていたという。

その結果、天皇としての行動は、憲法と皇室規範から下されるので、常に判断にブレが少ない。つまり、体得された基準から意志決定を行うので、妥当な判断が可能となった。これは諸外国の

マスコミが伝えた、故明治天皇を称える哀悼の論評からもわかる。

《君主たるミカドの人格というものが無かったならば、政治家たちもあそこまで仕事を遂行することは出来なかつたらうし、また遂行するにあたつてもっと時間がかかつたに違いないということである。ミカドが備えていた資質の中に人間を見抜く能力があつて、これは恐らく一国の君主が持つべき資質の中で最も貴重なものである。憲法欽定に先立つ会議に欠かさず出席したことに示されたように、ミカドは国事に熱心かつ勤勉だった。また細かいことに到るまで記憶力に優れ、肉体的、精神的ともに極めて勇気があつた。またミカドは、自身の個人的安楽をまったく顧みることがなかつた》(The Globe 紙 ドナルド・キン著『明治天皇・下』新潮社2001刊)

この記事を書いたグローブ紙の記者は、どのように情報を入手したのか。多分、明治天皇の側近であつた日本人が外国の報道機関に「洩らした」と推測し、それを敷衍するならば、天皇側近たちは、天皇の資質という個人的能力を高く評価していたことがわかる。

その通りで、明治天皇の個人的能力が優れていたことは、既に何回となくお伝えしているが、政治面で仕えるのは、伊藤博文、山県有朋、西園寺公望、桂太郎等の政治家と官僚たちで、全員卓抜な才能をもつ人物であり「その持つ能力」を天皇に提供するところで任務を全うしていた。

そこで、仮に、これら優れた能力を持つ提供者に、明治天皇が同じく個人的能力で対応していたならば、どういう状態になつたであろうか。

多分、それは政治家・官僚たちから反発を受け、グローブ紙が

述べる「政治家たちもあそこまで仕事を遂行することは出来なかつたろう」という評価にはならなかつただろう。

明治天皇の人格と能力、それに加えて憲法と皇室規範によって鍛えたブレない判断基準があつたからこそ、素晴らしい治世を四十五年間も続けられたのである。

しかし、明治天皇の立場になつて考えれば、憲法と皇室規範に基づく行動とは、立憲君主制国家での法制上から発するものであつて、それは自然人としての人間である部分を少なくさせる結果とならざるを得ない。

さらに、政治家や官僚も同様で、法制的存在という立場から天皇に接することになり、その場合も自然人としての行動はとれない。したがつて、天皇と政治家・官僚の関係は、親密な報告・連絡・奏上はあるものの、そこには人間的な親密さに欠けることになる。つまり、好きな人間としては、政治家・官僚とは接し得ないのである。

そこでもう一度、司馬遼太郎の言葉を借りたい。『司馬遼太郎対話選集4 近代化の相克』（文春文庫 2006刊）

《あの人（注 明治天皇）の好きな人は、山岡鉄舟、元田永孚、西郷隆盛、乃木希典で、さらいなのは山県有朋、黒田清隆です。要するに男性的な人物が好きだつたようですね》

ところが、この四人は臣僚ではなく、別の立場から天皇に接して「好きな人物」という評価を受けていたが、それには明治天皇に何かつ隠された大きな区別基準、物差しがあるはず。それは何か。

西郷は《天皇が落馬して痛いと言つた時、西郷は、どんな事があつても痛いなどはおつしやつてはいけませんとたしなめたという》

『明治天皇』伊藤之雄著 ミネルヴァ書房2006刊）、これは臣僚としての立場ではない。昔の家老や側仕えが大名の嫡男を育てようとしているときの接し方である。つまり、臣僚でなく家来といえる。

家来とは、主君や主家に仕える者、古くは家礼、家頼などと書き、家来は中世以降で使われたが、もともと親・尊族を敬い、礼を尽くすこと、転じて、他人に礼を尽くすことという意味合いを持つている。西郷は家来として明治天皇に仕えたのである。

この西郷の推輓で侍従となつたのが鉄舟である。鉄舟は今まで見てきたように二種の求道家である。無私ということをもつて、大悟する目標とした。そのため剣を追求し、禪によつて劍機を悟り、一刀正伝無刀流を創始し、春風館をひらいた。

鉄舟の明治天皇への仕えも家来であつた。司馬遼太郎は『殉死』（文芸春秋 2009刊）で次のように鉄舟を語つている。

《中世のころ、草ぶかい関東の野で鎌倉武士たちがつれて歩いた郎党、郎従、家ノ子といわれる存在にちかひものが山岡鉄舟であり、それであればこそ、帝は鎌倉武士がその郎党を愛したように鉄舟を愛した》《山岡鉄舟から人間としての骨格をつくるためのなにかを学ばれた》

鉄舟は家来として明治天皇に献身し、禪修行を通じて明治天皇に影響を与え、明治天皇は憲法という自己判断基準を自ら創りあげたのである。

長らくご愛読をいただき感謝申し上げます。これにて連載を終了させていただきます。

## 『酔いの徒然』（二四〇） 丸山 酔宵子

### 『我が母校の思い出』

高校卒業後60年、コロナ禍で5年ぶりの同窓会が10月末に横浜で開かれた。1945年（昭和20年）の戦後生まれも、もう既に喜寿を越えて78歳である。一昔前では、78歳と言えば大方が鬼籍に入っているであろうに、医療医薬の進化で生涯100歳時代を迎えようとしている。

### 喜寿も過ぎ卒寿に向かふ暮の秋

#### 酔宵子

我が母校私立栄光学園は中学高校一貫男子校で、ロマン・カトリック教会イエズス会によって、1947年（昭和22年）に神奈川県横須賀市田浦の旧海軍施設跡地に設立された。

イエズス会とは、イグナチオ・ロヨラやフランシスコ・ザビエル等によって創立された修道会で、400年以上

に渡り全世界で各種教育活動に従事している。

日本においてもフランシスコ・ザビエルによりキリスト教が伝えられた16世紀に、早くも有馬・安土・臼杵等にセミナリオを創設し教育活動を始めたが、禁教令と鎖国で、長きにわたって全ての活動が停止されてしまった。

改めて明治末期になって、イエズス会員が再び来日し、新しい時代を担う青少年の教育を理想として、まず、1913年（大正2年）上智大学が設立されたのである。栄光学園創立時、ドイツ神父初代校長グスタフ・フォスは、戦後間もない混乱の中で、日本人としての誇りと希望を持って、これからの日本を担う立派な青少年の育成を目指し、施設・設備等の整備・充実に日夜苦勞を重ねてきた。

教師陣も世界のイエズス会士も担当し、ドイツ、アメリカ、アイルランド、ブラジル、ハンガリー、ロンビア、スペインなど、たどたどしい日本語を駆使しながら、身振り手振りで、わんぱくな我々を指導していた。

校舎は旧海軍の魚雷学校の設備をそっくり利用している、冷暖房は一切無し。校舎の前は軍港で、教室の窓からは、爽やかな朝日を浴びる自衛艦の艦上でラッパに合

わせた国旗掲揚やきびきびした業務交代儀式などが眺められた。後方は米軍に接収された弾薬庫があり、鉄条網に囲まれた小高い森には鉄砲を捧げ持った屈強な米兵が巡回していた。

### 爽やかな朝日を浴びる自衛艦

酔宵子

防空壕も至る処に残っていて、土曜日午後には探検と称して、懐中電灯を掲げ、独靴はかなり広く長いので、命綱として長い紐をもって奥の奥までよく行った。一説には、三浦半島を縦断していて、横須賀まで続いているという話まであった。そのうち学校側は危険として、コンクリートで入り口を固められてしまった。

グラウンドはかなり広かったが、軍用の施設跡地を潰しただけで、そこら中にコンクリートが散乱し、草も茫茫で、よく全校生参加で草むしりさせられたものである。

第1期生は2クラス72人でスタートし、我々は12期で、1クラス40名で4クラス160人。グスタフ・フォス校長の教育方針で、全校生徒の顔と名前を覚えらるるのが1学年160名の高校生も含め960名。

それ故、成績とか素行などの問題があると、授業中でも、フォス校長からの呼び出しがあり、校長直々のお説教を喰らうのである。小生はいろいろな意味の問題児で、度々校長室に呼び出され、ドイツ人の逞しい腕で抱きしめられ、厳しくそして優しく怒られたものである。

授業に集中することを厳しく要求され、「毎日8時間は必ず睡眠をとること」が必須課題であった。第二時限の後には四季を問わず真冬の雪の中でも、半身裸で中間体操をするのである。

ノーベル賞候補、ジャーナリスト、医者、弁護士、大学教授、上場会社社長、政治家など多士済々で、そんな厳しい8年間を過ごしてきた同窓生は矢張り絆が深い。

その同期160人中25人が亡くなり、生存生の半分は65人が今回一堂に会したのである。頭髪無し、白髪、杖持ち・・・いろいろな姿に変わっているが、まともに見つめ合えば瞬時に60年前の姿に戻るのである。

いつ会へる冬眠などは出来ぬ明日

酔宵子

## 王子の狐の行列祭

きつねのぎょうれつ

高橋育郎

1、人里離れた 森の中

朧に霞む 月明り

そんな寂しい 夜がきて

提灯ゆらりと 揺れている

ひとざとはなれた もりのなか

おぼろにかすむ つきあかり

そんなさみしい よるがきて

ちようちんゆらりと ゆれている

2、白塗り子狐 すまし顔

嬉し恥ずかし 紅つけて

みんな揃って お社に

幸せ祈りに 参ります

しろぬりこぎつね すましがお

うれしはずかし べにつけて

みんなそろって おやしるに

しあわせいのりに まいります

3、まんまる月夜に 浮かぶ影

今年も暮れて ゆくわいな

ちっちゃな肩に 手を添えた

母さんの温もり あたたかい

まんまるつきよに うかぶかげ

ことしもくれて ゆくわいな

ちっちゃなかたに てをそえた

かあさんのぬくもり あたたかい

4、北風木枯らし 小夜更けて

狐の行列 消えました

そんな不思議な お話が

遠い昔に あったとき

きたかぜこがらし さよふけて

きつねのぎょうれつ きえました

そんなふしぎな おはなしが

とおいむかしに あったとき

## 絹の話 (157)

「アトリエテレビ」今泉雅勝

### 綿と真綿

最近、販売促進を兼ねて絹の歴史や機能性の「お話し会」を各地で開く事が多くなってきました。

販売していて、色々な質問を受けます。一番多い質問は絹の洗濯方法で、この様な質問には立ち話で対処方法を充分お伝えできますが、野蚕絹と家蚕絹の機能性の違いとか、絹の歴史などに及ぶと話は簡単ではありませんので、皆様の関心がある話をまとめてお話ししたほうが良いサービスになると思います「絹の話」の会を続けています。

### 絹の会の会場

最近「絹の話」の冒頭に絹の歴史を簡単に話して、皆様の絹に関する認識のベースを揃える様にしています。話の早い段階で会場にいらっしゃる方に真綿を勢いよく広げて頂き、糸糸を作る話をします。

参加者の興味が真綿に集中し会場が締めまり、話がし易い空気が醸し出されます。

70才以上の方は我が意を得たりと言わんばかりの「したり顔」をしています。60才以下の方は不可思議な物を初めて見る緊張感に包まれています。

角真綿(袋真綿)が僅かに絹鳴りの音を響かせて想像を遙かに超えた大きさに広がり、会場からは感嘆の低い声が一斉に広がります。私は会場の皆様の顔つきを見て、初めての人が多い時は話の流れを少し脱線させて真綿の歴史を話します。

話が終わって駆け寄って来られる人は三通りあります。先ず、幼い時真綿を広げて木綿の布団綿の上に祖母に言われるまま被せる様に包む手伝いをした事を喜々とした表情で話す人。その人の後に少しきまりが悪そうに顔をして、遠慮がちに真綿という言葉は知っていました。が、実物を始めて見て触り、その感触に感動しましたという人。最後に真綿が絹だとは今の今まで知りませんでしたと、明るく屈託ない人がいます。

### 綿は木綿、真綿は絹

昨今は綿と言えば木綿の綿を指しています。ところが、日本に木綿が一般化する前(江戸時代前期)までは綿と言えば絹の綿を指していて、木綿が一般化するにしたがって、いつしか木綿の綿を「綿」という様になり絹

の綿は「真綿」と言われる様になりました。

しかし「糸」という字も絹糸を指していますので、糸への綿を木綿の綿と理解させるのには無理がありません。漢字は表意文字ですので木綿の綿は「棉」と書けば誰にも理解して頂けると思います。

従って綿と真綿は全く別物です。

### 真綿は木綿100%ではありません

絹の話が終わった会場で、年配の方に「今まで木綿100%の物が真綿である」と信じてきましたと言われた時は私もビックリしました。そんな事は思ってもみませんでした。絹が遥か遠くに思えました。

### 角真綿

角真綿は煮て柔らかくなった繭を30cm×40cm角に引き伸ばして3×5粒重ねたもので、1粒が1200m×1500m（現在の繭）の糸が縦横に重なったものです。それは女性の髪の毛の1/20×1/25の細さの親和性に満ちた糸です。

用途によって袋状に作られた物が袋真綿と言われます。

### 絹綿

絹綿も絹の綿ですので真綿と混同されますが、絹綿は繭の外側の毛羽や生糸を作る過程で短く切れて屑となった繊維を綿状にしたもので、真綿と同じ様な用途に使われますが、真綿の方がより弾力性があり、ふっくらした高級感があります。

### 真綿の使い方

絹の日本への伝播は弥生時代初期に稲と同じように南方から伝わったものと、3×5世紀に北部中国から朝鮮半島経由で伝わった二つのルートがあります。

前者は真綿や絹綿から紬糸を作る文化で、後者は湯の中の繭から揚がる一本の忽を合わせて糸を作る生糸の文化です。いずれのルートでも紬糸が作られました。後者のルートは屑繭を原料にしました。

古代では給与の一部として臣下に支払われたり、軽く緩衝性に優れているので綿甲冑として兵装用に使われました。木綿が普及す迄の日本では冬の寒さから身を守る為、衣類の中綿や夜具に利用され、昭和の中期までは風邪をひくと真綿を首に巻いたりした庶民の生活必需品でした。

## 「江上浩二の独り言」 72 江上浩二

### あおいマスク

今日は令和5年10月の下旬、予定されている行動をとらねばならない。それは毎月通院している主治医に呼び出された20日前に決まったとある理由にて、早朝より都内の大病院にて頭部のMRI検査と造影剤を注射してX線による血流検査を行う事である。

普通に、自宅の白いマスクをして、先ずMRI検査室へ赴くと、先生より院内専用のあおいマスクに替えて下さいと言われて、捨てはしなかったが白い自宅マスクを取り、少しきついあおいマスクを装着して、検査台へ上がり横たわった。そこでお決まりの頭部を固定され、防音用の耳栓を押し込んで検査に入った。閉所恐怖症の方には辛いですが、私は平気。だが今回はちよつと違う、このあおいマスクを通して呼吸しなければならぬ。狭い筒状の中に頭部が固定された状態で、閉所恐怖症ではありませんと言った手前、ゆっくりと鼻から息を吸い、口から吐き出すというカイロプラクティック全体の若先生に教わった方法で乗り切った。

余裕が出て、MRIの磁場が印加される際に、耳を遮蔽し

ているのだが凄いい音がする。その音を聴き澄ませていると音の低、中、高域の3つが使われていて、それらが各々、別々に数秒間のうちに音の強弱が正確に繰り返され、デジタルの8ビットのように聞こえたのである。その初めの規格化みたいなことが済むとついに本番の検査が開始され、時間は正確には分からないが数十秒間ずつ、ブーブー、ガーガー、キーキー、時には短くドンと変な音楽みたいなセッションが続いて、20分の行程が終了した。

次は別の検査室へ移動し、少し時間をおいて脳の血流検査のパートへ入った。こちらは、X線CTの部類だが、造影剤を注射針で腕の血管へ注入しながら画像を取る方法らしい。血液検査や献血では左利きの私は左手を差し出すが、今回は装置の移動方向と私の寝ている方向との関係で選択の余地はなく、はい、右手でということになった。

私は初めての経験だ。同じような検査台へ仰向けになりこれが結構堪えるのだが、普段背中が丸く前傾になっている姿勢をいきなり数十分間、固い台へ臥し、頭部はやはり固定されて静かにしていなければならぬ。ここの若い先生は時間が長くなるので、あおいマスクをずらして結構と言いつ、息がし易い状態でこちらは音もなく遮光用のアイマスクを願いますといわれ、ウトウトして知らないうちにこれで終了ですと声がかかった。こちらはそれで40分もの検査時間。

こういった検査は70歳を超えた高齢者医療保険証を持たされている者にとっては特段特別な事ではないが、相当な検査費用だ。これまで45年間も払い続けている健康保険料、まだ若く病院の世話にはならないよという健康者の保険料、そして税金助成が原資だが、まだ仕事をしているお前は現役並みの実入りがあるからと言われ、逆らえずに3割の自己負担をしている。

最近は大分病院もモダンで何とかというカフェもあり、ドリンク付きの簡単なランチサンドウィッチを食べ帰宅。もつと余裕を持った生活をすればいいのだが、それが出来ずに、早々にノートPCでメールチェック、タブレットでニュース閲覧をして、それらを終えて、好きなYouTubeでもと思い、アプリを立ち上げたところ、勝手に私の好きな朗読が紹介されており、何と菊池寛のマスク・小文の題目が、いつもの朗読者窪田等氏で紹介されていたのである。なんと偶然、今日のおおいマスクの記憶がタブレットの画面へ指を急がせたのである。

そこには菊池寛の別世界があり、約100年前の大正8年のスペイン風邪の大流行の際に書かれた短編マスクであることを初めて知ったのである。今まさに我々が経験している新型コロナウイルスによる状況が、流行性感冒と呼ぶことしかなかった時代と同じような経験が記されている。しか

し、100年前の医学の状況はいいかばかりか、悲惨なことが書かれておらず、死者が国内で1日30000人を超えたとかあり、菊池寛の関心事は弱者である自分の不健康、弱い脈、心臓の弁の併合が悪い・手術が出来ない、脂肪心、駆けてはけない・脅かし、発熱・流行性感冒への恐れ、野菜食、伝染を恐れ妻も出来るだけ外出せぬよう家に籠った生活が記されている。

ところで、菊池寛はマスクについて、3月末でも気温も上がっているのにまだマスクをせねばならぬ、さらに、5月になつて暑くともマスクが必要なかと、文句まがいの気持ちで吐露。そこに、23-4才の黒い布製マスクをしている若者への嫉妬が加わるのだ。感染拡大に繋がる大勢の人がいるスポーツ観戦にこれから行くであろう若者がよっぽど強い男と見たのであろう。

令和の新型コロナウイルスの感染抑制対策に対してはノーベル賞を受賞したBRIANワクチンに頼っているが、最近になつて副作用による死者数が非常に多い事、直つても長期の後遺症で強そうな若者も含んで相当な数の人々がマスクを外そうが別の部類と思われる症状で普通の営みが送れずに臥している。私は終わりに記した現代医療でも予期せぬ二つの重大事に遭遇し、未結審の訴えの如く次の100年へ先延ばしにはしてくるなという想いでいっぱいである。



初狩便り  
(25)



花野みぷり



## 甲州百目柿

甲州百目柿は、釣鐘形をした大型の渋柿で、一個の重さが百匁（約三七五グラム）ぐらいあること、古くから甲府盆地周辺で栽培されていることから、この名称になったらしい。

初狩の集落には、甲州百目柿のある家が何軒もある。そのなかの一軒、隣の畑のCさんから百目柿をいただいたとリーダーの内山さんが言っていた。さつそく皮を剥き、紐をつけ、熱湯に二瞬浸すと表面はつるつときれいになり、消毒にもなるらしい。二階のベランダにつるして数日、干柿が出来上がった。「特別だよ」と言つて、一つをくれた。とろつと生っぽく、ぎゅつと濃縮された甘さ、旨さは例えようがない。

初狩ではないが、甲府盆地の南にある市川三郷町の友人宅には甲州百目柿の大きな木がある。一本で八百個ぐらい生るといふ。採るのも大変、皮むきも大変、干すのも大変だとこぼしていた。だいぶ前のことだが、彼女から甲州百目柿を二十個ほどもらい、私も干し柿に挑戦したことがある。ところが東京の気温では干柿特有の白い粉がふいたようにはならず、なんだか腐ったようになって捨ててしまった記憶がある。

初狩の晩秋は寒い。寒いからこそ旨い干柿ができるのだ。

（写真…内山和夫 矢野都紀子）

## 本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2023年10月30日

### アレルギーとウイルス

今日は朝から快晴です

満月の影響が強く出た数日でしたが

過ごしやすい秋となっています

秋といえば夏の異常気象の影響なのか

シンプルに花粉の飛散量が多くなり

その為

今年から秋花粉の症状が始める方が多く感じます

免疫がおかしくなり 更には乾燥も相まって

皮膚の問題 目の問題 □や鼻の問題

などが出始め

内臓の問題から 肩 背中 腰 のハリ  
ぎっくり系へとつながってきます

先ずはウイルスを体内に入れない様に

手洗い うがい マスク アルコール

で防いで行きましょう

そのうえで

3S+ゆたぼん+ヨーグルト十八分

湯船にゆつくりつ

かりリラククスし

て

日々の疲れをリ

セットしていきま

しょう



今日も笑いながら  
行きましょ

## 2023年11月1日 同じ姿勢に気をつけて

今日から11月です

今年も残すところ2か月になりました

週末は日中の気温も上がるようで

ビックリですが大掃除のチャンスですね笑

前回の 本田のひとり言 で

ぎっくり系の事を書きました

本田カイロにいらっしやる患者さんは

健康値が高いので抜けきらずに

無理すると抜けそう・・・

という症状で止まることがほとんどです

それを感じる事で

抜けてしまふ動けなくなるといふことがなくなります

今回のぎっくり系は

腸の問題を多く感じます

ですので

3S+ゆたぼん+ヨーグルト+八分

ヨーグルトの種類を変えてみたり

摂取回数を増やしてみてください

座りっぱなしは止め 15分〜30分に1回は

立ち上がったリトイレに行きましょう

温かい飲み物も飲

みましょう

今日も笑いながら

行きましょう



## 「皮膚の呼吸と肺呼吸」

人の呼吸は 身体の  
内側外側 気のめぐり  
陰陽盛衰 調節し  
身体の活動 支えてる  
呼吸にや二つの呼吸あり  
日中行う 陽呼吸  
夜に行う 陰呼吸  
二つで陰陽 調節す

陽の呼吸は 皮膚呼吸  
気の出し入れ 皮膚でする  
太陽・陽気が上がる時  
皮膚表面が温まり  
動いて全身温まりや  
余分な熱を 逃がすため  
血管・毛穴や汗腺が  
開いて 陽気を発散す

夕方・夜には陰の気が  
皮膚表面を冷やすゆえ  
体表閉じて 内部へと  
陽気を向かわせ 温存す  
皮膚は陽気を呼吸する

陰の呼吸は 肺呼吸  
気の出し入れ 息でする  
吸う息 清気をとりにいれて  
吐く息 排気を維持してる  
日中 肺は呼吸にて  
気血を体表(体表) 皮毛へと  
運んで発散促すぞ  
夕夜の陰気で皮膚閉じりや  
呼吸は 肺が主となりて  
内側臓腑の 気の巡り  
動かし 調節 養うぞ  
夕方以降は落ち着つけば  
肺にて陰の呼吸をす

呼吸の陰陽 皮膚と肺  
二つの呼吸で 元気が戻る



「無駄が減ると流れ出す」

生きるは陰陽 流れなり  
陽の流れで 上昇し  
陰の流れで 下降する  
上がって下がってまた上がる

外の物・事 陽となり  
陽が多けりや 騒がしく  
身も心も 落ち着かぬ  
内の感覚 陰となり  
陰を満たせば 静かになりて  
心も体も 清らかじゃ  
楽に陰陽 流すには  
身軽が一番 最小限  
無駄を極力 減らしてな  
出し入れしてくが 基本なり  
現代豊かに 様々な  
物や情報 溢れてる  
物・事 少なきや 迷いなく  
心身共に 流れるが

必要以上の 物・事は  
心も体も 負担となる  
色々詰めこみや 陰陽の  
流れは悪く 停滞し  
身も心も 重くなる

食べ物 詰めれば  
胃が膨れ 栄養得るより  
消費して 食べた後に眠くなる  
頭に情報 詰め込めば  
頭の消化が悪くなり  
思考や感覚鈍くなる  
持ち物多いも同じなり  
自分の必要 知ることが  
無駄を減らす コツとなる  
最小限の 足るを知り  
物や情報 減らせれば  
人生軽やか 流れ出す



散策して野瓜を観る

殿山木風

十月天青く身を浄くすること弥し

一望の山翠は秋に満ちて宜し

路辺の藪に見る黄三四

感興の高吟少時を懐う

散策観野瓜

十月天青淨身彌 一望山翠滿秋宜  
路辺藪見黄三四 感興高吟懷少時

(語釈) ○野瓜：カラスウリ。

(通釈) 十月の晴れた日は空青く、身を淨くしてくれる。眺められる山の緑は秋の空気に満ち満ちて良いものだ。歩く道ばたの小さな藪に黄色いカラスウリが三、四個見える。

感興を覚えて俳句を吟じると、思わず少年の頃を想い出した。

※ 朝の散歩が気持ちが良い。夏の酷暑が長く続いた時は地球が壊れた、秋は来るのかしらと思う事さえあった。確実に季節は廻るのである。

秋を迎えると、日本は何と良いものかと思いたくなる。朝の散歩は格別である。

秋の季語であるカラスウリがあのだばたにあるなど、ずっと以前から思っていた。子供の頃からカラスウリは知っていたが、食べることは出来ないし、何となくつまらないものか思っていた事を思い出す。しかし、この歳になつて季節の移り変わりに良いものかと思うものの一つである。

その道ばたのおばさんが偶々お顔を見せた。おはようございますと、即興で俳句を吟じた。「アラ良いものですねー。この辺は大通りから道一つ隔てただけですが、とても閑か良い所ですよ」と顔をほころばせて言った。私の家はすぐ近くである。私は挨拶や会話が苦手であると意識しているが随分変わってきたもんだと思った。気分の良い朝の散歩なんです。

カラスウリ小藪に見たり三四個

カラスウリ色を急ぐな好時節

## 編集室だより【二〇二三年十月】

今泉 由利

年中行事になっている「アトリエ・トレビの企画、奄美大島、泥染めツアー」に便乗させていただいた。

奄美大島の、大島紬の手法、織り糸や、織りあがった布を：車輪梅の樹皮の木材を煮出した液に浸した後、奄美大島の鉄分をふくむ泥田に、幾度も、幾度も、中腰の作業をくり返す。

私は、個人的に、泥んこに入れない体質の故、泥染作業中を抜け出した。

マングローブの森に近付きたい。森の中で迷子にならないよう。ドライバーさんによくよくお願いして、出発。右側にも、左側にも前にも後にも、山々が脈となり、山の道から、透明感豊かな海が：見え、すぐトンネルに入る。トンネルを抜けると、山脈が囲う海があり：なんとも素晴らしい。山を、近くを、走るから、山に生えている木々が、

今の、時限<sup>レ</sup>ではない感が大きくおし寄せる。マングローブの森にわけ入り、マングローブの木々の間から海が見える。マングローブの森が、海に続いてゆくところ。

マングローブの赤ちゃんが、ポツンポツンと一本づつ。少し大きくなり、しっかり根を張り、水辺に立っているところ。沢山集まって森になってゆくところ。マングローブの森から、海になってゆく、その海の水のきれいだったこと。キラキラキラキラ…。

透明な海、深海の白いサンゴの欠けらが混じる。その辺りの海の透明感。心がしつかり洗われるきれいさです。海側から、山側へドライブする、太古の昔、奄美大島は大陸から離れたという。

ヒカゲヘゴのジャングル、ソテツのジャングル。種類の、木<sup>々</sup>だけで、なりたっている山が沢山あった。太古の昔、亜熱帯気候の中で進化してきた神秘が見える。奄美大島の中で最も標高が高く、空中湿度が高い雲霧帯、シダ植物の繁茂。

独特な進化を遂げた。

奄美大島の一番高い山（694 m）の湯湾岳、由井岳（484 m）山塊から海域まで、豊かな亜熱帯照葉樹林が連続して、この森でアマミノクロウサギ、アマミトゲネズミ、ルリカケス、オットンガエルなど遺存固有種、希少種の生息地となり、役勝川や河内川など河川には、滝が出来、リュウキュウアユが生息する。

本草も、「リュウキュウ」「オキナワ」「シマ」「ヤンバル」「アマミ」「ナンゴク」としつかりこの島の私の知る範囲でも見かける木々草々かなと思ふ固有種になっていて…何もかもしつかり、力強く生存しているのが…感心してしまう。

巨大な豆「モダマ」自生地へ。この辺にあるはず！という辺り、しつかり目を凝らして探す。あった。巨大なサヤの中に、もう一つのサヤにつつまれた大きな種。

湯湾岳から流れてくる水という、ものすごい勇いの滝。あの音、今も私に蘇る。

## 「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三  
東京都渋谷区恵比寿三・四五・三  
フォーレストヒルズ三〇二  
ケイタイ 090・8434・8646  
TEL 03・6765・5838
- ◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>  
E-mail [imayurizm@gmail.com](mailto:imayurizm@gmail.com)
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇どなたも参加、投稿いただけます。  
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。
- ◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。
- ◇会費制は廃止。
- ◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。
- ◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。
- ◇編集・発行 今泉由利